

かしわばやしの夜

宮沢賢治

青空文庫

清作は、さあ日暮れだぞ、日暮れだぞと云いながら、稗の根もとにせつせと土をかけていました。

そのときはもう、銅づくりのお日さまが、南の山裾の群青いろをしたところに落ちて、野はらはへんにさびしくなり、白樺の幹などもなにか粉を噴いているようでした。いきなり、向うの柏ばやしの方から、まるで調子はずれの途方もない変な声で、

「鬱金しやつぽのカンカラカンのカアン。」とどなるのがきこえました。

清作はびっくりして顔いろを変え、鋤をなげすてて、足音をたてないように、そつとそつちへ走って行きました。

ちようどかしわばやしの前まで来たとき、清作はふいに、うしろからえり首をつかまれました。

びっくりして振りむいてみますと、赤いトルコ帽をかぶり、鼠いろのへんなだぶだぶの着ものを着て、靴をはいた無暗にせいの高い眼のするどい画かきが、ぷんぷん怒って立っていました。

「何というざまをしてあるくんた。まるで這うようなあんばいだ。鼠のようだ。どうだ、

弁解のことばがあるか。」

清作はもちろん弁解のことばなどはありませんでしたし、面倒臭めんどうくさくなったら喧嘩けんかしてやろうとおもって、いきなり空を向いて咽喉のどいっぱい、

「赤いしやつぽのカンカラカンの力アン。」とどなりました。するとそのせ高の画かきは、にわかに清作の首すじを放して、まるで咆ほえるような声で笑いだしました。その音は林にこんこんひびいたのです。

「うまい、じつにうまい。どうです、すこし林のなかをあるこうじやありませんか。そうそう、どちらもまだ挨拶あいさつを忘れていた。ぼくからさきにやろう。いいか、いや今晩は、野はらには小さく切った影法師かげほうしがばら播まきですね、と。ぼくのあいさつはこうだ。わかるかい。こんどは君だよ。えへん、えへん。」と云いながら画かきはまた急に意地悪い顔つきになって、斜ななめに上の方から軽べつしたように清作を見おろしました。

清作はすっかりどぎまぎしましたが、ちようど夕がたでおなかが空すいて、雲が団子のように見えていましたからあわてて、

「えつ、今晩は。よいお晩でございます。えつ。お空はこれから銀のきな粉でまぶされま
す。ごめんなさい。」

と言いました。

ところが画かきはもうすっかりよろこんで、手をぱちぱち叩いて、それからはねあがって言いました。

「おい君、行こう。林へ行こう。おれは柏の木大王のお客さまになって来ているんだ。おもしろいものを見せてやるぞ。」

画かきはにわかになじめになって、赤だの白だのぐちやぐちやついた汚ない絵の具箱をかついで、さつさと林の中にはいりました。そこで清作も、鋤をもたないで手がひまなので、ぶらぶら振ってついて行きました。

林のなかは浅黄いろで、肉桂のようなにおいがいっぱいでした。ところが入口から三本の若い柏の木は、ちょうど片脚をあげておどりのまねをはじめるところでしたが二人の来たのを見てまるでびつくりして、それからひどくはずかしがって、あげた片脚の膝を、間がわるそうにべろべろ嘗めながら、横目でじつと二人の通りすぎるのをみていました。殊に清作が通り過ぎるときは、ちよつとあざ笑いました。清作はどうも仕方ないというような気がしてだまって画かきについて行きました。

ところがどうも、どの木も画かきには機嫌のいい顔をしますが、清作にはいやな顔を見

せるのでした。

一本のごつごつした柏の木が、清作の通るとき、うすくらがり、いきなり自分の脚をつき出して、つまずかせようとしてしまいましたが清作は、

「よつとしよ。」と云いながらそれをはね越えこえました。

画かきは、

「どうかしたかい。」といつてちよつとふり向きましたが、またすぐ向うを向いてどんどんあるいて行きました。

ちようどそのとき風が来ましたので、林中の柏の木はいっしよに、

「せらせらせら清作、せらせらせらばあ。」とうす気味のわるい声を出して清作をおどそうとしました。

ところが清作は却かえつてじぶんで口をすてきに大きくして横の方へまげて

「へらへらへら清作、へらへらへら、ばばあ。」とどなりつけましたので、柏の木はみんな度ぎもをぬかれていいんとなつてしまいました。画かきはあつはは、あつははとびつこのような笑いかたをしました。

そして二人はずうつと木の間を通つて、柏の木大王のところに来ました。

大王は大小とりまぜて十九本の手と、一本の太い脚とをもつて居りました。まわりにはしっかりとけらの柏どもが、まじめにたくさんがんばっています。

画かきは絵の具ばこをカタンとおろしました。すると大王はまがつた腰をのぼして、低い声で画かきに云いました。

「もうお帰りかの。待つてましたじや。そちらは新らしい客人じやな。が、その人はよしなされ。前科者じやぞ。前科九十八犯じやぞ。」

清作が怒つてどなりました。

「うそをつけ、前科者だと。おら正直だぞ。」

大王もごつごつの胸を張つて怒りました。

「なにを。証拠はちゃんとあるじや。また帳面にも載つとるじや。貴さまの悪い斧のあとをついた九十八の足さきがいまでもこの林の中にちゃんと残っているじや。」

「あつはつは。おかしなはなしだ。九十八の足さきというのは、九十八の切株だろう。それがどうしたというんだ。おれはちゃんと、山主の藤助に酒を二升買つてあるんだ。」

「そんならおれにはなぜ酒を買わんか。」

「買ういわれがない」

「いや、ある、沢山^{たくさん}ある。買え」

「買ういわれがない」

画かきは顔をしかめて、しょんぼり立つてこの喧嘩^{けんか}をきいていましたがこのとき、俄^{にわ}かに林の木の間から、東の方を指さして叫^{さけ}びました。

「おいおい、喧嘩はよせ。まん円い大将に笑われるぞ。」

見ると東のとつぷりとした青い山脈の上に、大きなやさしい桃^{もも}いろの月がのぼったのでした。お月さまのちかくはうすい緑いろになって、柏^{かしわ}の若い木はみな、まるで飛びあがるように両手をそつちへ出して叫びました。

「おつきさん、おつきさん、おつつきさん、

つにお見外^{みそ}れして すみません

あんまりおなりが ちがうので

つにお見外^{みそ}れして すみません。」

柏の木大王も白いひげをひねって、しばらくうむうむと云いながら、じつとお月さまを眺^{なが}めてから、しずかに歌いだしました。

「こよいあなたは ときいろの

むかしのきもの　つけなさる
かしわばやしの　このよいは
なつのおどりの　だいさんや

やがてあなたは　みずいろの
きょうのきものを　つけなさる
かしわばやしの　よろこびは
あなたのそらに　かかるまま。」

画かきがよろこんで手を叩きました。

「うまいうまい。よしよし。夏のおどりの第三夜。みんな順々にここに出て歌うんだ。じぶんの文句でじぶんのふしで歌うんだ。一等賞から九等賞まではぼくが大きなメダルを書いて、明日枝にぶらさげてやる。」

清作もすっかり浮かれて云いました。

「さあ来い。へたな方の一等から九等までは、あしたおれがスポンと切って、こわいところへ連れてってやるぞ。」

すると柏^{かしわ}の木大王が怒りました。

「何を云うか。無礼者。」

「何が無礼だ。もう九本^{くほん}切るだけは、とうに山主の藤助^{とうすけ}に酒を買ってあるんだ。」

「そんならおれにはなぜ買わんか。」

「買ういわれがない。」

「いやある、沢山ある。」

「ない。」

画かきが顔をしかめて手をせわしく振^ふつて云いました。

「またはじまった。まあぼくがいろいろにするから歌をはじめよう。だんだん星も出てきた。いいか、ぼくがうたうよ。賞品のうただよ。」

一とうしうは 白金メタル

二とうしうは きんいろメタル

三とうしうは すいぎんメタル

四とうしうは ニツケルメタル

五とうしうは とたんのメタル

六とうしうは にせがねメタル

七とうしうは なまりのメタル

八とうしうは ぶりきのメタル

九とうしうは マツチのメタル

十とうしうから百とうしうまで

あるやらないやらわからぬメタル。」

柏の木大王が機嫌を直してわはわはと笑いました。

柏の木どもは大王を正面に大きな環わをつくりました。

お月さまは、いまちようど、水いろの着ものと取りかえたところでしたから、そこらは浅い水の底のよう、木のかげはうすく網あみになつて地に落ちました。

画かきは、赤いしやつぽもゆらゆら燃えて見え、まっすぐに立つて手帳をもち鉛筆えんぴつをなめました。

「さあ、早くはじめるんだ。早いのは点がいいよ。」

そこで小さな柏の木が、一本ひよいつと環のなかから飛びだして大王に礼をしました。月のあかりがぱつと青くなりました。

「おまえのうたは題はなんだ。」画かきは尤^{もつと}もらしく顔をしかめて云いました。

「馬^{うま}と兎^{うさぎ}です。」

「よし、はじめ、」画かきは手帳に書いて云いました。

「兎^{うさぎ}のみみはなが……。」

「ちよつと待った。」画かきはとめました。「鉛筆が折れたんだ。ちよつと削^{けず}るうち待ってくれ。」

そして画かきはじぶんの右足の靴^{くつ}をぬいでその中に鉛筆を削りはじめました。柏の木は、遠くからみな感心して、ひそひそ談^{はな}し合いながら見て居りました。そこで大王もとうとう言いました。

「いや、客人、ありがとう。林をきたなくせまいとの、そのおこころざしはじつに辱^{かたじ}けない。」

ところが画かきは平気で

「いいえ、あとでこのけずり屑^{くず}で酢^すをつくりますからな。」

と返事したものですからさすがの大王も、すこし工合^{ぐあい}が悪そうに横を向き、柏の木もみな興をさまし、月のあかりもなんだか白っぽくなりました。

ところが画かきは、削るのがすんで立ちあがり、愉快^{ゆかい}そうに、

「さあ、はじめて呉^くれ。」と云いました。

柏はざわめき、月光も青くすきとおり、大王も機嫌^{きげん}を直してふんふんと云いました。

若い木は胸をはってあたらしく歌いました。

「うさぎのみみはながいけど

うまのみみよりながくない。」

「わあ、うまいうまい。ああはは、ああはは。」みんなはわらったりはやしたりしました。

「一とうしよう、白金メタル。」と画かきが手帳につけながら高く叫びました。

「ぼくのは狐^{きつね}のうたです。」

また一本の若い柏の木がでてきました。月光はすこし緑いろになりました。

「よろしいはじめっ。」

「きつね、こんこん、きつねのこ、

月よにしつぽが燃えだした。」

「わあ、うまいうまい。わっはは、わっはは。」

「第二とうしよう、きんいろメタル。」

「こんどはぼくやります。ぼくのは猫ねこのうたです。」

「よろしいはじめっ。」

「やまねこ、にやあご、ごろごろ

さとねこ、たっこ、ごろごろ。」

「わあ、うまいうまい。わっはは、わっはは。」

「第三とうしよう、水銀メタル。おい、みんな、大きいやつも出るんだよ。どうしてもそんなにぐずぐずしてるんだ。」画かきが少し意地わるい顔つきをしました。

「わたしのはくるみの木のうたです。」

すこし大きな柏かしわの木がはずかしそうに出てきました。

「よろしい、みんなしずかにするんだ。」

柏の木はうたいました。

「くるみはみどりのきんいろ、な、

風にふかれて すいすいすい、

くるみはみどりの天狗てんぐのおうぎ、

風にふかれて ばらんばらんばらん、

くるみはみどりのきんいろ、な、
風にふかれて　　さんさんさん。」

「いいテノールだねえ。うまいねえ、わあわあ。」

「第四^しとうしよう、ニツケルメタル。」

「ぼくのはさるのこしかけです。」

「よし、はじめ。」

柏の木は手を腰^{こし}にあてました。

「こざる、こざる、

おまえのこしかけぬれてるぞ、

霧^{きり}、ぽっしやん　ぽっしやん　ぽっしやん、

おまえのこしかけくされるぞ。」

「いいテノールだねえ、いいテノールだねえ、うまいねえ、うまいねえ、わあわあ。」

「第五とうしよう、とたんのメタル。」

「わたしのはしやつぽのうたです。」それはあの入口から三ばん目の木でした。

「よろしい。はじめ。」

「うこんしやつぽのカンカラカンのカアン

あかいしやつぽのカンカラカンのカアン。」

「うまいうまい。すてきだ。わあわあ。」

「第六とうしよう、にせがねメタル。」

このときまで、しかたなくおとなしく聞いていた清作が、いきなり叫びだしました。

「なんだ、この歌にせものだぞ。さつきひとのうたったのまねしたんだぞ。」

「だまれ、無礼もの、その方などの口を出すところでない。」柏の木大王がぶりぶりして
どなりました。

「なんだと、にせものだからにせものと云ったんだ。生意氣いうと、あした斧おのをもってき
て、片っぱしから伐きってしまうぞ。」

「なにを、こしやくな。その方などの分際でない。」

「ばかを云え、おれはあした、山主の藤助とうすけにちゃんと二升酒を買ってくるんだ」

「そんならなぜおれには買わんか。」

「買ういわれがない。」

「買え。」

「いわれがない。」

「よせ、よせ、にせものだからにせがねのメタルをやるんだ。あんまりそう喧嘩^{けんか}するなよ。さあ、そのつぎはどうだ。出るんだ出るんだ。」

お月さまの光が青くすきとおってそこらは湖の底のようになりました。

「わたしのは清作のうたです。」

またひとりの若い頑^{がん}丈^{じょう}。そんな柏の木が出ました。

「何だと、」清作が前へ出てなぐりつけようとしましたら画かきがとめました。

「まあ、待ちたまえ。君のうただって悪^{わる}口^{ぐち}ともかぎらない。よろしい。はじめ。」

柏の木は足をぐらぐらしながらうたいました。

「清作は、一等卒の服を着て

野原に行つて、ぶどうをたくさんとつてきた。

と斯^こうだ。だれかあとをつづけてくれ。」

「ホウ、ホウ。」柏の木はみんなあらしのように、清作をひやかして叫びました。

「第七^{しち}とうしよう、なまりのメタル。」

「わたしがあとをつけます。」さっきの木のとなりからすぐまた一本の柏の木がとびだし

ました。

「よろしい、はじめ。」

かしわの木はちらつと清作の方を見て、ちよつとばかにするようにわらいましたが、すぐまじめになつてうたいました。

「清作は、^{ぶどう}葡萄をみんなしぼりあげ

砂糖を入れて

^{びん}瓶にたくさんつめこんだ。

おい、だれかあとをつづけてくれ。」

「ホツホウ、ホツホウ、ホツホウ、」柏の木どもは風のような変な声をだして清作をひやかしました。

清作はもうとびだしてみんなかたつぱしからぶんぐつてやりたくてむずむずしましたが、画かきがちゃんと前へ立ちふさがっていますので、どうしても出られませんでした。

「第八等、ぶりきのメタル。」

「わたしがつぎをやります。」さっきのとなりから、また一本の柏の木がとびだしました。

「よし、はじめっ。」

「清作が 納屋^{なや}にしまった葡萄酒は
順序^{しゆじ}ただしく

みんなはじめてなくなった。」

「わつはつはつは、わつはつはつは、ホッホウ、ホッホウ、ホッホウ。がやがやがや……
。」

「やかましい。きさまら、なんだってひとの酒のことなどおぼえてやがるんだ。」清作が
飛び出そうとしましたら、画かきにすっかりつかまりました。

「第九^くとうしよう。マッチのメタル。さあ、次だ、次だ、出るんだよ。どしどし出るんだ
。」

ところがみんなは、もうしんとしてしまつて、ひとりもでるものがありませんでした。

「これはいかん。でろ、でろ、みんなでないといかん。でろ。」画かきはどなりましたが、
もうどうしても誰^{たれ}も出ませんでした。

仕方なく画かきは、

「こんどはメタルのうんといいいやつを出すぞ。早く出ろ。」と云いましたら、柏の木ども
ははじめてざわつとしました。

そのとき林の奥^{おく}の方で、さらさらさら音がして、それから、

「のろづきおほん、のろづきおほん、

おほん、おほん、

ごぎのごぎのおほん、

おほん、おほん、」

とたくさんのふくろうどもが、お月さまのあかりに青じろくはねをひるがえしながら、するするする出てきて、柏の木の頭の上や手の上、肩^{かた}やむねにいちめんとまりました。立派な金モールをつけたふくろうの大將が、上手に音もたてないで飛んできて、柏の木大王の前に出ました。そのまつ赤な眼^めのくまが、じつに奇体^{きたい}に見えました。よほど年老^{としよ}らしいのでした。

「今晚は、大王どの、また高貴の客人がた、今晚はちようどわれわれの方でも、飛び方と握^{つか}み裂^さき術との大試験であつたのじやが、ただいまやつと終わりましたじや。

ついてはこれから連^{れんごう}合で、大乱舞^{だいらんぶ}会をはじめてはどうじやろう。あまりにもたえな
るうたのしらべが、われらのまどいのなかにまで響^{ひび}いて来たによって、このようにまかり
出ましたのじや。」

「たえなるうたのしらべだと、畜生^{ちくしょう}。」清作が叫びました^{さけ}。

柏の木大王がきこえないふりをして大きくうなずきました。

「よろしゅうござる。しごく結構でござろう。いぎ、早速とりはじめるといたそうか。」

「されば、」梟^{ふくろう}の大將はみんなの方に向いてまるで黒砂糖のような甘^{あま}ったるい声でうたいました。

「からすかんざえもんは

くろいあたまをくうらりくらり、

とんびとうざえもんは

あぶら一升^{しょう}でとうろりとろり、

そのくらやみはふくろうの

いさみにいさむもののふが

みみずをつかむときなるぞ

ねとりを襲^{おそ}うときなるぞ。」

ふくろうどもはもうみんなばかのようになっていました。

「のろづきおほん、

おほん、おほん、

ごぎのごぎおほん、

おほん、おほん。」

かしわの木大王が眉まゆをひそめて云いました。

「どうもきみたちのうたは下等じや。君子くんしのきくべきものではない。」

ふくろうの大將はへんな顔をしてしまいました。すると赤と白の綬じゆをかけたふくろうの副官が笑つて云いました。

「まあ、こんやはあんまり怒らないようにいたしましょう。うたもこんどは上等のをやりますから。みんな一しよにおどりましょう。さあ木ほの方も鳥ほの方も用意ほういいか。

おつきさんおつきさん まんまるまるるん

おほしさんおほしさん ぴかりぴりるるん

かしわはかんかの かんからかららん

ふくろはのろづき おつほほほほほん。」

かしわの木は両手をあげてそりかえったり、頭や足をまるで天上に投げあげるようにしたり、一生けん命おと踊りました。それにあわせてふくろうどもは、さっさつと銀いろのはね

を、ひらいたりとじたりしました。じつにそれがうまく合ったのでした。月の光は真珠しんじゆのように、すこしおぼろになり、柏の木大王もよろこんですぐうたいました。

「雨はざあざあ　ざつざざざざあ

風はどうどう　どつどどどど

あらればらばらばらつたあ

雨はざあざあ　ざつざざざざあ」

「あつだめだ、霧きりが落ちてきた。」とふくろうの副官が高く叫びました。

なるほど月はもう青白い霧にかくされてしまつてぼおつと円く見えるだけ、その霧はまるで矢のように林の中に降りてくるのでした。

柏かしわの木はみんな度をうしなつて、片脚かたあしをあげたり両手をそちちへのぼしたり、眼をつ

りあげたりしたまま化石したようにつつ立つてしまいました。

冷たい霧がさつと清作の顔にかかりました。画えかきはもうどこへ行つたか赤いしやつぽだけがほうり出してあつて、自分はかげもかたちもありませんでした。

霧の中を飛ぶ術のまだできていないふくろうの、ばたばた遁にげて行く音がしました。

清作はそこで林を出ました。柏の木はみんな踊おどりのままの形で残念そうに横眼で清作を見

送りました。

林を出てから空を見ますと、さつきまでお月さまのあったあたりはやつとぼんやりあかるくて、そこを黒い犬のような形の雲がかけて行き、林のずうつと向うの沼森のあたりから、

「赤いしやつぽのカンカラカンのカアン。」と画かきが力いっぱい叫んでいる声がかすかにきこえました。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社

1924（大正13）年12月1日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かしわばやしの夜

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>